

第123回 期間賞

信毎俳壇・歌壇の第123回期間賞（2026年1〜6月）が決まりました。入賞者には賞状と記念品を贈ります。

歌壇

小林・せき・春日さんに

米川千嘉子選

【期間賞】

「さよ子にはいばられちゃって」と亡夫の言いしめしめと亡母の顔を忘れず

（上田市）小林さよ子

【評】亡き人がそばに来て、ありありとその表情を見せてくれる時がある。妻に威張られちゃって、という言葉には照れをユーモアに包んだ夫の愛情がにじみ、その言葉に「しめしめ」とでもいうように微笑んだ母には、娘の



小林さよ子さん

【評】まだ言葉を得る前のいわゆる喃語だが、そんな説明を入れずにいきなり「ううぶー」という声音で一首を始めたのがいい。乳飲み子の命の存在感が出た。その上で、その子が朝焼けに感動している、というところに着地している。おそらくは、祖母である

【次席】ううぶーと話しかける乳飲み子よ吾もこの朝焼けを言葉に出来る
（千曲市）中村 美樹

【評】まだ言葉を得る前のいわゆる喃語だが、そんな説明を入れずにいきなり「ううぶー」という声音で一首を始めたのがいい。乳飲み子の命の存在感が出た。その上で、その子が朝焼けに感動している、というところに着地している。おそらくは、祖母である

びのびと暮らせているらしいことへの安堵がある。自分を愛してくれた人たちの表情がユーモアとアクセントをもった活き活きと刻まれていて、歌がきれいな事にならなかった。

【次席】

小池 光選

【期間賞】

阿波踊りのおっさんおとつているようだわが干し物に吹く初夏の風

（長野市）せきたつお

【評】男踊りと女踊りがまったく違って、それが不思議に調和しているのが阿波踊り



せきたつおさん

【評】まだクーラーなど無かった時代。人々はこうやって涼を取ったものである。おそらく井戸で冷やした西瓜だろう、冷たいそれにかぶりつく。かたわらでおばあさんが団扇で風を送ってくれる。いまの時代ではほとんど見られなくなった光景だが、とつちの夏の

【次席】縁側に冷えた西瓜を置きながら祖母の団扇の風がやさしく
（塩尻市）島津 文雄

りのおもしろさだ。じぶんで洗った洗濯物が風に揺れる。その揺れ加減を阿波踊りの「おっさん」に見立てているのがゆかいだ。いかにも夏の訪れという感じがする。いつのときでも洗濯物が乾くのは気持ちのいいものだ。じぶんで洗った下着ならなおさら。自由な発想から楽しい歌に仕上がっている。

小島 なお選

【期間賞】

友は近き雀膨らむ空の下一万円を借りたままで

（高山村）春日きみ子

【評】まあいいか、と言えるほど一万円は決して安いお金ではない。もう返すことのできなくなってしまう一万円はどうすればいいのだろう。紙一枚によって、あの世と奇妙に繋がりが続いているような。隣にいたはずの友人はいなくなり、雀はふつくと



春日きみ子さん

【評】ケトルにお湯が沸いているのか、加湿器の水蒸気の音か。二人のあいだの気まぐれ沈黙に静かな蒸気の音だけが響いている。「そういうもん」の言葉には、「そういうもん（だから仕方ないよ）」や「そういうもん（だから我慢しなよ）」の諦めや決めつけがうかがえ、会話を遮断しようとする残酷さがある。結局「ねえ」は虚空に投げられた声のように空白に漂っている切ない。

【次席】羽毛を膨らませて冬支度をしている。死んだ者と生きている者との狭間にぽっかりと私は浮かんでいる。
（佐久市）いわまむかし